

市長あいさつ



下野市長 広瀬寿雄

「ヒロシマを知ることは未来を考えること」という言葉があります。

ヒロシマの事実に触れ、ヒロシマの真実を知り、戦争のない平和な未来に向けて自分たちができることを考える、そういった意味と解します。

今年で広島・長崎の原爆投下から71年が経ちました。この71年という長い年月の間に広島はめざましい復興を遂げ、今年5月には原爆投下国の現職大統領として初めてオバマ大統領が広島を訪れるという歴史的な出来事がありました。

しかし、流れた年月の分だけ被爆者の高齢化は進み、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさなど、ヒロシマの事実・真実を生々の声で聞くことができる機会は確実に少なくなっています。

下野市は、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を願い、平成18年6月16日に「非核平和都市宣言」を行いました。また、世界でただ一つの被爆国の国民として、戦争や原爆の記憶を風化させることのないよう、平和行政の推進に取り組んでいます。

中学生平和研修派遣事業は、非核平和都市宣言の推進及び平和学習活動の一環として、市内4中学校の生徒を広島に派遣するもので、平成26年度から実施し、今年で3回目となりました。

生徒たちは各学校の代表として、そして下野市の代表として平和記念式典へ参列するとともに、各学校の全校生徒が戦争の犠牲になられた方々のご冥福と平和の思いを込めて折った千羽鶴を「原爆の子の像」に奉納しました。

また、広島平和記念資料館、原爆ドーム、原爆死没者慰霊碑などの見学、灯ろう流し体験、そして被爆体験講話で被爆された方の生々の声を聞きました。

その中で生徒自身の「目」、「耳」そして「心」で感じ、「平和の尊さ」、「平和を愛する心」を学び、恒久平和への理解と認識を高めていただいたことと思います。

今後は、各中学校の文化祭等において報告会を実施し、広島で感じたこと、学んできたことを他の生徒たちに伝え、共有するとともに、さらに次の世代へ伝えていってもらえるものと期待しています。

最後に、本事業にご参加いただきました生徒及びその保護者の方々、また、事業実施に向けてご協力いただきました多くの方々から心から御礼申し上げます。

下野市中学生平和研修に参加して

下野市中学生平和研修派遣団団長 日下田英彦

8月5日（金）より3日間、下野市中学生平和研修派遣団団長として、中学生を引率し広島での研修に参加してきました。昨年度から、壬生町と合同で行っていますので、下野市の4校から男女各1名ずつ8人、壬生町の2校から4名、合わせて12名の派遣となりました。中学生の皆さんは事前の研修のときから積極的に、研修への意欲の高さを感じました。

個人的には3度目の広島となったため、ある程度の知識もありわかったつもりになっていたところもあったのですが、事前の研修を受け広島の歴史や、復興までの多くの人々の努力を知ると、同じ物を見ても感慨深く、「知る」ことで終わらせずに、「知る」ことから「考える」ことにつなげなければと思いました。初日に、原爆ドームを見学した後、広島で被爆され、現在はピースボランティアとして活動されている川本さんの講話を聞きました。原爆で亡くなった何万という人の悲しい現実にも胸が痛くなる思いでしたが、草木1本残らずに焼け野原となった焦土で、家族も失い子どもだけで生き延びていった辛い日々、劣悪な環境の中で暮らし、成長しても被爆者として差別される現実、仕事や結婚まで思うようにならず、一発の原爆により多くの人々の人生を狂わせてしまう兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さを思いました。川本さんは、現在は会社を興し、ピースボランティアとしても活躍されているそうですが、川本さんのように、不幸に負けずたくましく生き抜いていった多くの方の努力があったからこそ、今、戦後70年がたち、広島は美しい都市として復興してきたのだと思います。

2日目、8月6日には平和記念式典に参列しました。何度もテレビ映像では見ていましたが、実際に参列すると、多くの国からの参列者の姿もあり、この平和式典にいっしょに参加しているのだという思いから、空気の違いを感じました。テントでは、安倍総理大臣が真横に見える前列の位置で、スピーチを聞くことができました。広島市長の平和宣言もオバマ大統領のスピーチを引用しすばらしいものでしたが、小学生の代表による「平和への誓い」には心を打たれました。「……私たちは、もっと知りたいのです。もっと伝えたいのです。…」、この言葉は私たちの今回の研修の目的を代弁してくれているのだと思いました。

平和の尊さを、平和のありがたさを伝えるためには、「知る」ことだけでは足りません。毎年反省ですが、8月6日を迎える時だけ、平和への関心が高まります。8月9日の長崎も8月15日の終戦記念日も、そして記念日でないどの日にも平和について考えなければいけないのです。また、世界の平和を祈るためには身近な平和についても考えなければなりません。私たちは学校の教員ですので、まず自分の学校が、あるいは自分の学級が争いのない平和なところとなるよう努

かしなければと思います。

今回の研修は、次の世代を担う中学生として、式典の厳粛な雰囲気や見学を通して、生命の尊厳や平和の価値を肌で感じ取り、平和活動のリーダー的な生徒に成長してもらいたいという目的のもとで行われました。団員の皆さんは、研修の目的を理解し、下野市の代表として、また壬生町の生徒とも協力して、意欲的に責任をもって行動していました。

最後になりますが、平和研修派遣事業に関わり、このような機会を与えてくださった市当局の皆さま、準備や送迎に協力してくださった保護者の皆様に心から感謝申し上げます。



平和大橋から見た原爆ドーム



平和記念資料館

平和大通り



下野市中学生平和研修派遣事業に参加して

南河内中学校 二年 安齊 大和

「この真っ黒に横たわっているのは・・・」僕は写真の前で、ショックのあまり固まってしまいました。1945年8月6日午前8時15分人類史上初めて原子爆弾が広島に落とされました。何の罪もない人々がその人生、その命を奪われた瞬間です。その原子爆弾の名前はリトル・ボーイと言い、ふつうの爆弾とは違いウランやプルトニウムが核分裂するときに発生するエネルギーを兵器として大きな破壊力をもっていました。その熱線の中心温度は百万度を超え強大な爆風も同時に起こり建物は押しつぶされたそうです。僕が原爆資料館で見た黒こげで亡くなった少年はまさか自分がその日に命を奪われるとは直前まで思わなかったでしょう。前日、家族や友人と話したり、ふつうの生活をしていたかと思うとつらい気持ちで胸いっぱいになります。この強烈な熱風が少年の夢や人生を奪い広島の街もグチャグチャに破壊したのです。

また、原子爆弾の恐ろしい所は放射線の影響です。22歳のある兵士は屋内で被爆し、脱毛、全身からの点状出血が起こり数日後歯茎がはれ、高熱が続き原爆投下2日後に亡くなりました。放射線による被害は時間をおいてから発症することがあります。白血病という血液のガンや悪性腫瘍、関節機能障害や精神的にも苦痛をもたらすケロイドがあります。現在も苦しんでいる方々が多くいます。

2日目、平和記念式典に参列し広島市長の「被爆者の平均年齢は80歳を超え、自らの体験を生々の声で語る時間は少なくなっています。未来に向けて被爆者の思いや言葉を伝え、広めていくには、若い世代の皆さんの力も必要です。」というお言葉を聞いた時これが僕達の使命だと改めて心に刻みました。

平和の子の像の所に千羽鶴を奉納しました。色とりどりのあふれるほどの鶴がありました。この鶴一羽一羽には平和への願いが込められています。日本国内だけでなく海外からの千羽鶴もありました。近年、広島を訪れる海外の方が増えているとテレビで伝えているのを見ました。世界が広島に注目し核兵器廃絶と命の尊さ、恒久平和の輪が広がっていくことを強く望みます。そして今回平和研修派遣事業を通して僕の血肉になったもの、すなわち全人類共通の願いである平和で美しい地球を残すこと、非核三原則を堅持し、地球上から核兵器をなくすことを学校の仲間や地域社会の皆さんと共に願い、さらに考えたいと思います。そして僕は今回の体験をもとに、今日の平和に改めて感謝し、戦争や原爆の悲惨さを風化させることのないように、生命の尊さを機会があることに広く後世に伝えていくよう努めます。

この度、3日間の研修中、ご指導して下さった団長の南河内中学校日下田校長先生、石橋中学校の田代先生、下野市役所の大口さん、南犬飼中学校の木村先生、壬生町役場の宇賀神さん、添乗員の神山さん、また、このような貴重な機会を作っ

てくださった下野市長広瀬寿雄様、教育委員会教育長池澤様、そして事前準備、計画を立ててくださった下野市役所の職員の皆さまには感謝の気持ちでいっぱいです。同時に学校の壁を越え、共に学び、多くの経験を共有した仲間との時間は僕にとって宝物です。このような機会をいただき本当にありがとうございました。



「広島に行って」

南河内中学校 二年 関 日真里

私は、8月5日から7日の3日間広島を訪れ、たくさんの事を学ぶことができました。広島で見た物、聞いた事はどれも印象的な物ばかりでした。

その中でも、まず印象的だった事は広島市の街並や雰囲気です。およそ70年間は草木が育たないと言われていたとは思えないほど美しく、立派な街でした。100メートル道路はとても大きく、木々や花なども至る所で見られました。今の広島から、あの日広島に原子爆弾が落とされた面影は全くありませんでした。たくさんの広島の人々が、被爆した人々が自分達の手で、協力し合って今の広島を築いてきたんだと思うと、とてもすばらしい何かを感じました。この、何事にも負けずに、手を取り合って今の広島を築いてきた人々の事を見習って、これからの学校生活や、大人になって社会人として活かしていこうと思います。

そして、もう一つ印象的だったのは、平和記念資料館や、原爆ドームなど、その当時の建物や当時の写真など、直接原子爆弾に関わっており、自分の目で見たことのできる物です。原爆ドームを見た時は、言葉に表すことのできないような衝撃がありました。何か、原爆ドームの周りの雰囲気だけが冷たく、悲しみに満ちた空気に包まれているのです。原爆ドームの近くに行くと私達も、他の観光客の方々もあまり他の場所と同じように喋ったりしている人は中々いなく、原爆ドームの周りにいる人々はその独特な空気に包まれているように感じました。原爆ドームをよく見ると、鉄が曲がったまま落ちそうになっていたり、柱と柱がくっついていたりして原爆の恐ろしさを物語っていました。平和記念資料館では、被爆した人々の皮膚やキノコ雲の写真を見ていて、改めて原爆はあってはならない物なんだと感じました。平和記念資料館に展示してあった物は全てから原爆の恐ろしさを感じました。原爆ドームや平和記念資料館を見て感じたり思ったり、考えた事は私の周りにいる友達や学校の生徒や家族、地域の方々にも全て伝えようと思います。

最後に、私はこの3日間という短い時間でたくさんの事を学び、見て感じ、考えさせられました。「原爆」こんなに恐ろしい事が日本でおき、今でも放射線の被害に苦しむ人がいます。1945年8月6日午前8時15分とても晴れわたった良い天気の中、世界で初めて原子爆弾が広島に投下され、一瞬にしてたくさんの人々の命を奪い、たくさんの人々を苦しめました。この出来事は、絶対に忘れずに次の世代「私達の世代」が受けついで、「原爆」の恐ろしさ、原爆の記憶をたくさんの人々に知ってもらわなくてはなりません。ですから私は、今回の中学生平和研修派遣事業で学んだ「原爆」の恐ろしさ、原爆の記憶を、今ある幸せを途絶えず伝えていきます。

広島に降り立ったその時、私は大きな衝撃を受けました。ビルが建ち並び、路面電車が行き交い、緑がとても多いところでした。ここが71年前、1発の原子爆弾によって焼け野原となったとは、全く想像できませんでした。地面の下には多くの方の命が眠っていると思うと、言葉では言い表すことのできない感情が押し寄せてきました。それと同時に当時、70年は住めないと言われていた広島を復興させた当時の人たちの力に驚かされました。

私たちは広島に行き、被爆体験講話会や平和記念資料館の見学、平和記念式典参列、灯ろう流しの体験など貴重な体験をたくさんさせていただきました。その中でも被爆体験講話会と平和記念資料館の見学がとても印象的でした。

被爆体験講話会では、当時小学校6年生で被爆された川本省三さんの話を聞きました。川本さんによると、たった1機の爆撃機が落としていった原子爆弾によって多くの命が瞬時にしてなくなり、その年の12月までに、14万人の方が亡くなったそうです。救援活動が行われましたが、薬の供給が追いつかず、さらに多くの方が亡くなったと言われています。

また、戦争が終わっても、被爆者たちはひどい差別を受けていたと聞きました。「放射線を浴びているから」と結婚もさせてもらえず、仕事に就けない方も多かったそうです。私はこの話を聞いて、戦争が終わって世界が平和になっても、被爆者の心に残った傷は癒えないのだと感じ、戦争は絶対にしてはいけないことだと改めて思いました。

川本さんは、私たち中学生に向けて、「感謝の心を忘れずに。勉強できるのが当たり前、おなかいっぱい食べられるのが当たり前という考えではだめ」とおっしゃっていました。さらに「責任の押し付け合いをしているのでは本当の平和は生まれてこない」ともおっしゃっていました。

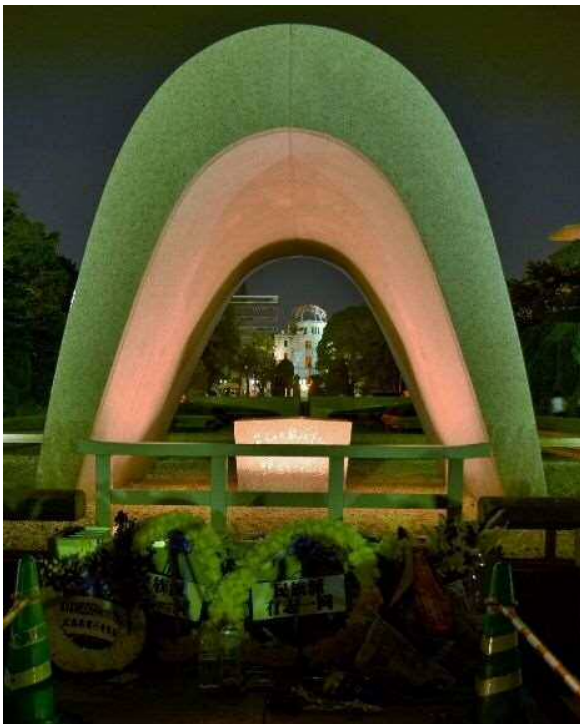
また、平和記念資料館の見学では、戦争のむごさを肌で感じ取ることができました。焼けただれた皮膚を引きずって歩く人を再現した人形や焼け焦げた服、変形したガラス瓶、背中や両腕がケロイドになった女性の写真は見ていて本当に胸が痛みました。どの展示品も目を覆いたくなるものばかりでした。

私はこの平和研修派遣事業を通して平和について深く考えることができました。平和な世界は、口で言っているだけでは作ることができません。世界にはまだ、1万発を超える核弾頭が存在しています。それらをなくすためにも、世界中の一人ひとりが平和を意識し、行動することが大切だと思います。さらに、広島・長崎に原爆が落とされた時、終戦の時だけでなく、平和について話し合う機会をもっと増やすべきだと思います。

また、平和記念式典の「平和への誓い」でも言っていたように、被爆者の平均年齢が80歳をこえ、被爆者の思いや被爆の事実を聞きたくても聞けなくなる日が近づいています。実際に被爆された方から話を聞くのと、記録から学ぶのとで

はとても大きな違いがあります。被爆者の生の声が聞くことができなくなる前に、私たちはもっと平和について関心をもち、平和を肌で感じ、記憶を絶やすことなく次の世代に語り継いでいかなければいけません。想像するだけでは難しいかもしれません。しかし、平和な世界を作り上げていくには、記憶を絶やさず、語り継いでいくことが重要だということが改めてわかりました。

この3日間はとても充実した3日間となり、私の中で宝物となりました。平和な世界を作るためにも、戦争を二度と繰り返さないためにも、この体験で学んだことを周りのみんなにしっかりと伝えていきたいと思います。



見上げるほどの高層ビルが建ち並び、広い道路では多くの車が行きかい、路面電車までもが走り、鮮やかな緑の木々に囲まれた今の広島の様からは、71年前に原爆が落とされた街であることを想像もできませんでした。

派遣団員として実際に広島へ行き様々な体験をさせていただいた、この3日間はとても充実していて、一生忘れることのない貴重な経験となりました。私はこの研修で初めて、核兵器の本当の恐ろしさを知りました。特に印象に残っていることは、被爆された方による講話と資料館の見学です。

11歳で被爆された川本さんは、ご自身の体験と共に原爆が投下された後の街や人々の様子を、私達一人ひとりの目をみて、お話ししてくださいました。想像もできない、知らない事実ばかりでした。私は話を聞いている間、恐怖と悲しさに襲われました。一番心に残ったことは、大人になった川本さんが、「あなたは放射能に汚染されているから、結婚したら障害のある子が生まれる。だから結婚できない。」と好きだった人に断られてしまったことが本当に悔しかったと、今でも悔しそうに話してくださいました。当時は同じ言葉で結婚を断られた方が多くいたそうです。この話を聞いて気づきました。たった一発の原子爆弾は、一瞬で多くの命と夢と日常を奪い、心には一生いえることのない傷を負わせてしまうことを。核兵器の本当の恐ろしさを知った瞬間でした。

資料館では原爆による被害の実態を目にしました。燃え盛る炎の中を手足の皮膚が焼けて垂れ下がった姿で歩く女性のモデルです。それは事前研修時の講話で聞いていましたが、実際に見てみるとあまりにも衝撃的でした。資料館には、他にも多くの資料があります。全て本物だと思うと、信じられませんでした。私は何とも言えない気持ちになりました。

核兵器の本当の恐ろしさ。それは、一瞬にして多くの命、夢、日常を一生分奪うこと、人を人の姿でなくさせることです。広島は、あった過去が信じられないほどの復興をとげました。けれど、以前の広島に戻ることは二度とないと思います。広島や全国各地には多くの被爆された方がいて、全ての方が、あれから71年たった今でも後遺症やあの日の記憶、出来事に苦しみ続けているからです。その傷がいえない限り、もとの広島に戻ることはできないと思いました。

私はこの研修から、私達に与えられた使命について考えました。まず第一に、事実をすること、そしてそれを発信していくことだと思います。誰だって抵抗はあるけれど、しっかりと過去と向き合い、それを受け止めなければいけないのだと思いました。私達には広島を知る義務があると思いました。

私は学んだこと、感じたこと、思ったことを自分だけのものにせず、一人でも多くの人へ真実と共に伝えていくことを決意しました。それが核なき世界、平和な世界を作るためのほんの小さな手助けになると信じ、自分の使命を精一杯果たしたいと思います。

今から 71 年前、広島には原爆が投下され、辺り一面が焼け野原になったそうです。僕が初めて行った広島の景色は、そんなことがあったとは、人から教えられなければ絶対にわからないようなとても都会的なところでした。でも、その高層ビルの下には、きれいに舗装された道の下には、何万もの犠牲になった命がある。そう思うと、戦争のむごたらしさ、そして、そこから立ち上がろうとした人々の勇氣、決意などたくさんの思いが伝わってきました。

今回の研修では、最初に、被爆された方の体験講話を聞くことができました。被爆者が体験したという場面を想像するだけで、「これは本当に僕の生きるこの世界の話なのだろうか。」と、自分の耳を疑うような恐ろしい光景が頭に浮かびました。想像するだけでぞっとするような光景を実際に目にし、体験した方々はどれだけ辛かったのだろうかと思うと、言葉にならないような感情がこみあげてきました。

広島での平和記念資料館の見学では、原爆の悲惨さをそのままに物語る、被爆された方々の傷の写真や焼けただれた皮膚を引きずる人の模型、熱で変形した鉄骨や瓦などがたくさん展示してありました。一つ一つがとても衝撃的な物ばかりで、本当に見ているのが辛くなりました。「地獄」を間近で見ているような感覚で本当に恐ろしかったです。もう二度とこんなことは繰り返してはいけなと思いました。

参列した平和記念式典では、小学生二人の平和への誓いがとても心に残りました。「待っているだけではなく、私たち一人一人が、平和な世界を作る。」被爆体験講話をしてくださった方も、同じことをおっしゃっていました。いつかは聞けなくなってしまう被爆者の声を、思いを、途切れることのないように人に伝えることが、僕のできる平和な世界を作るための第一歩なのではないか、と聞きながら考えていました。

広島訪問の最後には、原爆の子の像に、学校代表として平和への願いを込め、千羽鶴を奉納してきました。僕たちが行った時には、たくさんの千羽鶴がすでに奉納してあり驚きました。どの地域のどんな人も平和への願いはみな同じだと思い、なんだか少し嬉しくなりました。きっと、たくさんの人が広島の出来事を知ること、平和を願う気持ちになり、その気持ちが戦争や原爆が世界から無くなることにつながるのではないかと思います。

僕はこの平和研修で、今ある平和がいかに尊いかということ、改めて感じました。知識として学ぶことはできない「思い」や「意志」を、原爆を投下され、そして素晴らしい街へと復興をとげた広島の地で、目で、耳で、肌で感じてくることができ、とても貴重な経験になりました。自分にできる平和への一歩として、広島の「思い」や「意志」を周りの皆に伝えていきたいです。

何気ない家での暮らしや学校生活の日々。私はそれが当たり前のことだと思っていました。しかし、広島で実際に見て、聞いて、学んで、それがどれだけありがたいことなのかを知ったのです。

8月6日の出来事。それは今もなお、たくさんの人々を苦しめているのだと、そのおじいさんは話してくれました。「あの日広島に原爆が落とされ、約6万人もの人間が一瞬のうちに死んでしまった・・・」、「誰も原子力爆弾が落とされたとは知らずに、いつになっても家に帰ってこない家族や友人を市内に探しに行ったんだ・・・」、「そのために、残留放射能に被爆してしまった・・・」とおじいさんはその当時の話をしました。おじいさんも被爆者の一人だったのです。

更におじいさんは当時の状況をいろいろと話してくれました。道には皮膚が垂れ下がった人や燃え続ける家。火傷の手当てをしようとしても薬がなく、食用油をぬり包帯を巻いていたそうです。そして、ついには食用油もなくなり、機械油をぬっていたそうです。親を亡くして引き取り手のない子供や、親戚の家に引き取られても追い出されてしまい、飢えのために死んでしまい路上に転がっている子供の死体。川には水を求めて入った人々の死体が浮いていたそうです。どうにか生き残った子供たちは、生きるために食べ物を盗んでいたそうです。当時の広島の様子はとてもひどかったのだと痛感しました。

今ではそんな恐ろしいことがあったとは思えないほど広島は美しい街でした。これも広島の人々が力を合わせて頑張ってきたからこそ成し遂げられたのです。焼け野原になった広島を一から作り上げたように、私たちがみんなで力を合わせ核兵器廃絶を訴え続け平和を願うならば、いつか必ず争いがなくなり、みんなが笑顔で暮らせる世の中になると私は信じています。



僕は初めて広島を訪れました。まず最初に感じたこと、それは街の復興力の凄さです。広島駅を出ると道路には路面電車が走り、数多くのビルなどが建ち並んでいました。

しかし、もともとそこは71年前のあの出来事で焼け野原となり、何もかもが無くなってしまった場所でした。がれきの焦土と化した大地には75年は草木は生えないとされていたのですが、爆心地から820メートルという所にたったひと月余りで咲いた花がありました。それが、真っ赤なカンナの花です。放射能にも負けずにわずかひと月で芽を出し咲かせたカンナの花に、人々は生きる勇気と希望をもらったといいます。

そして、当時の市長である浜井信三氏は、平和を祈念するため、広島平和記念公園の建設、同じく市中心部への幅員100メートル道路、平和大通りの建設を打ち出し、現在の広島市の街並みの基礎を造ったそうです。僕はどんな困難な状況でも、決してあきらめなかった当時の人々の心にとても感動しました。

被爆体験講話会では当時のことを川本さんという方が語って下さいました。原爆が落とされた広島にはケンカや犯罪も増えたとし、親を亡くした孤児たちは生きていくのが大変だったそうです。更に、原爆の影響でケロイドに苦しんだり、その後長い年月にわたり白血病に苦しんだりしたそうです。老若男女を問わず多くの人々の幸せだったはずの人生が狂ってしまったのだと僕は思いました。

その後、原爆ドームと平和記念資料館を見学しました。

僕は原爆ドームをテレビでしか見たことがなかったのですが、実際に自分の目で見てみると、とても生々しく、原爆の恐怖というものを改めて実感しました。

平和記念資料館では、被爆した方が持っていたものなどの実物が展示してあり、原爆の威力がどれほどすさまじいものだったのかを目にする事ができました。

2日目の平和記念式典の際、平和への誓いを、子ども代表の二人が力強く言っていたことに感銘を受けました。その誓いの最後に、「命の尊さを、平和への願いを、私たちが語り伝えていきます。」と書いていましたが、とても大切なことだと思いました。戦争や原爆に対する意識を風化させないためにも僕たちが伝えていかなければいけないと思います。

その日の夜に行われた灯ろう流しでは、自分の灯ろうに、「私たちは平和になることを願います。」という意味の英文を書きました。そして、それが叶えられますようにと願いを込めて川に流しました。

今回の平和研修派遣事業では、たくさんの方のことを自分の肌で感じたり、自分の目で見て聞いたりして多くのことを学ぶことができました。これらのことを自分たちの学校だけに止まらず、地域の方々にも伝え、核兵器のない平和な世の中にするために小さな力ではありますが、尽力したいと思います。

広島平和研修について

国分寺中学校 二年 篠崎 優花

今回の平和研修ではたくさんの事を学ばせて頂きました。まずは私にとって貴重な機会を与えてくださった下野市長広瀬寿雄様をはじめとした市の職員の皆様、また引率をしてくださった先生、職員の皆様には本当に感謝しています。本当にありがとうございました。

私は広島に行く前、戦争について考えてみました。なぜ戦争をするのだろうか。こんな私でも戦争は怖いものでしてはいけないとわかるのに…と思いました。戦争をしたところで手に入れられるものはありません。もし勝ったとしても手に入れられるものがあっても、それは戦争によって奪われてしまった命より大切なものなのだろうか。何度考えても、その答えは私には探し出せませんでした。

私が広島に行ったときに想像もしていなかった光景が目飛び込んできました。それは、原子爆弾が落とされたとは思えない広島の復興した姿です。きれいな町並み、豊かな緑に大きな道路。しかしそれと同時に思うこともありました。この復興した広島の今ある地面に下には、数え切れないほどの死体や瓦礫が埋まっているのではないかと。こんなにきれいな町になるには本当に時間がかかったのだろうと思います。

原爆資料館内は本当に息が詰まるような展示物ばかりでした。特に印象に残っているのは写真です。悲惨だったの一言では表せないほどのものでした。その写真は地獄でも見ているようなものばかりでした。

被爆された方のお話は、本当にこの場所で起こったことなのかと耳を疑いました。町には水を求めて歩く皮膚が垂れ下がった人々、川には水を求めて死んでいった人々、救護所には手当てを受けるために群がった人々、その時の広島は本当に悲惨な光景だったと聞きました。私はこれを聞いて言葉が出ませんでした。本当に圧倒されました。自分が生きている世界で起きたことだとは信じられない思いでした。

私が見たり聞いたりしたこと、戦争のことを知らない若い人が増えています。戦争を体験した世代の高齢化により戦争を語ることのできる人が減ってきているので、身近な問題として感じる事ができていません。私もその一人であり、今回知ったことも、戦争のごく一部にすぎません。だからこそもっとよく知るべきだと私は思いました。

今回の学習を通して、今私たちが暮らしている世界は当たり前ではないということを実感しました。普通に道を歩く。しかし戦争をしていたら地雷を踏んで命が奪われるかもしれません。私たちが普通と感じる今は「平和」という土台が

あればこそなのだと思います。そして平和は願うだけでなく、二度と戦争を起こさないために行動することにより維持されていくと思います。国や宗教の違いは関係ありません。同じ地球に住む掛け替えのない命を持つ者として向き合うことが大切です。「平和」や「命」をどんなものよりも優先していこうという気持ちで、今回の研修を通して強くなりました。

